

発表者

野上慶子氏

ご質問①

○野上氏は6～12才児を持つ母親、高堰氏は2～6才児を持つ母親を対象としていたが、子どもの年齢との関係性について何かお考えがあれば、伺いたい。

○また、父親をはじめ、他の家族が対象となっても問題はないですか？

(事務局注；この質問は、野上氏、高堰氏双方へのご質問となっております。)

ご回答①

子どもの年齢との関係性について：本プログラムでは親介在型のアプローチを用いて子どもの認知面や行動面に働きかけており、ある程度の言語理解力が備わっている年齢である必要性が考えられました。また小学校と中学校では学校環境が異なるため子どもの不安場面にも相違があることや、思春期に入ると親離れを始める子どもがいる可能性が考えられます。そのため、小学生と中学生では不安症状に関する問題や親子関係に差異があり、異なる介入方法が求められると推測されました。以上の理由から、本研究では対象者を6歳から12歳に焦点化いたしました。

父親など他の家族を対象とすること：家族の中で子どもとの関わりが多く、家庭内外での子どもの様子をよく知っている方であればお父様あるいはそれ以外の方を対象にしても良いと思います。